「むなしさ」に関する研究の概観と展望

臨床心理学コース　　大　上　真　礼

The review and perspective of the studies on “*munashisa*”

Maaya OOUE

“*Munashisa*(emptiness)” is a common feeling in many people. Yet there are only few studies in Japan. Both articles from overseas and those in Japan can be divided into two groups. Overseas’ research shows 1) relation of Borderline Personality Disorder characteristics and emptiness, 2) emptiness experienced after a life event. In our country, researches are about 1) “*munashisa*” as a factor of Eating Disorder, and 2) developmental and systemic point of view. The focus on further research should be 1) psychopathological investigation, 2) the process and a variety of “*munashisa*” depending on developmental stage, and 3) study of positive meaning in “*munashisa*”.

目　　次

1．問題と目的
2．文献検索方法と調査対象の決定
3．海外の研究動向
　A．境界性パーソナリティ障害をはじめとする精神医学的問題との関連
　B．諸問題に対する心理的反応としての「むなしさ」
4．国内の研究動向
　A．摂食障害との関連を中心とした精神医学的観点からの調査研究
　B．発達臨床心理学的観点，システムとの関わりの観点からの調査研究
5．研究の課題と方向性

1．問題と目的

現代は，多くの人が物質的に豊かな暮らしを送っている。便利な生活は容易に手に入ると考えられるが，その中でも我々の心が必ず満たされているとは限らず，むなしさを感じることもあるだろう。「むなしさ」[1] は現代において身近に感じられるといわれており（竹内，2007）[2]，諸冨（1997）[3] は，疲労感や無気力感を抱き頑張ることに意味を見いだせない人が多く存在することや，現代社会で広く抱かれている「むなしさ」の深刻さを指摘している。

“むなしい”という形容詞の辞書的な意味としては，松村（1998）[4] によって以下のように示されている。

1　空虚である。内容がない。
2　無益である。むだである。かいがない。
3　かりそめである。はかない。
4　（「己をむなしゅうする」などの形で）我欲・先入観などを捨てる。
5　事実無根である。根拠がない。
6　死んで魂がない。

ここから，むなしさはいくつもの意味をもつことがわかる。また，類語としてははかない，空虚，無常などが挙げられる（武部，2004）[5]。心理学の分野においては，「むなしさ」を空虚感，無力感と並べて論じたり，ほぼ同じ概念と捉えて調査研究を行っていたりする文献も多数存在する。

また，「むなしさ」と精神障害・精神的健康の関連としては，境界性パーソナリティ障害（Borderline Personality Disorder; 以下BPDと表記）の診断基準[6] のひとつに「慢性的な空虚感」とあることや，うつ病患者が抱く無力感，空虚感についての指摘（Zung, 1965)[7] が挙げられる。BPD，あるいはうつ病をはじめとする気分障害のいずれにおいても，自殺・自傷や未遂か既遂かなどの差こそ存在するものの，自殺企図が問題となることが少なくない。我が国における自殺者数が昨年は微減したとはいえ，３万人前後で高止まりを続けている（内閣府，2012)[8] という現状の中で，「むなしさ」はメンタルヘルスの問題を読み解く一つのキーワードとなりうるといえる。

しかし，「むなしさ」が現代日本においてどのように感じられているかは，これまでの研究で十分に把握できているとはいい難い。たとえば，これまでに日本

において行われてきた「むなしさ」の研究は，精神的問題を抱え自殺者数も多い年代でもある中高年期について扱ったものは極めて少ないことが挙げられる。また，先に述べたような精神障害と「むなしさ」の関連についても，心理的な介入の示唆を得るような，罹患群とアナログ群の実証的な比較研究はほぼ存在しないのが現状である。加えて，「むなしさ」やそれに関連・類似する概念である無力感・空虚感について扱った心理学分野での研究は，散発的にはみられるものの，それらの知見の統合，理論化，一般化はなされていない。

そこで本稿では，「むなしさ」について，もっとも一般的とされる英訳語であるemptinessについての欧米での研究動向と，我が国の「むなしさ」そして「むなしさ」に近い感情として論じられることの多い無力感・空虚感について全般的に研究動向を概観する。これにより，「むなしさ」を抱える人への臨床心理学的な援助に資する研究のための重要な視点を提供することとする。

2．文献検索方法と調査対象の決定

国内の文献，海外の文献の双方において，2013年9月1日に検索を行い，1990年以降に行われた研究について収集した。国内の文献については，検索エンジンCiNiiを利用し，「むなしさ　心理」「無力感　心理」「空虚感　心理」をキーワードとして検索を行い，この中で実証的な研究を行っている30件が対象となった。なお，ここでは臨床心理学的な考察を行うため，教育心理学の観点からの調査も多く含まれる「学習性無力感」という形で語を使用している文献については触れていない。海外の文献については，検索エンジンPsycInfoとPsycArticlesを利用し，“emptiness”をキーワードとして検索を行った。その結果の中で，一事例での介入報告，理論的検討のみを行っている文献を除いた。加えて，摂食障害などの精神障害と関係なく「空腹感」の意で“emptiness”の語を用いているものも除外したところ，23件が対象となった。このため，国内と海外の文献を合わせて53件を対象として考察を行うこととした。

3．海外の研究動向

海外における「むなしさ（emptiness）」の研究には，BPDやうつ病の特徴としてこれを取り上げ，年齢やライフイベントといった変数との関連を探るものが多数存在した。また，もう一つの研究の流れとして，症状としての直接的生理的な感情としての体験というよりも，身体疾患やライフイベントといった諸問題を経験した結果，二次的な心理的体験として個々人が感じる「むなしさ」についての研究群があった。このため以下ではそれぞれについて概観していく。なお，本章で「むなしさ」と表記する語はすべてemptinessの訳語として用いている。

A．境界性パーソナリティ障害をはじめとする精神医学的問題との関連

前述のとおり，BPDの診断基準の項目に「慢性的な空虚感（chronic emptiness）」が含まれていることから，構造化された診断面接で明らかにされたBPDの特徴と，その他の特徴の関連を探る研究が最も多くみられた。

Morgan et al.（2013）[9] は青年期と中高年期のBPD患者の比較を行い，後者がより「むなしさ」を感じていることを示した。中年BPD患者においては，「慢性的な空虚感」を感じているほど対人関係におけるストレスフルな出来事を体験する頻度が低い傾向にあることも報告されている（Powers et al., 2013）[10]。加えて，全般性不安障害においても，対人関係での困難や機能低下が「慢性的な空虚感」と関連している（Mavissakalian et al., 1995）[11] とされていることから，対人関係での充実感のなさや孤独感，対人場面での不全感が「むなしさ」を引き起こし，また逆に「むなしさ」が対人場面に入っていく意欲を減退させていることも推測される。

また，BPD患者の「むなしさ」の感じやすさについては，彼らは神経症患者と比べて記憶容量が少なく，孤独感は高い上に，ネガティブな過去の記憶をより多く記憶する傾向にあること（Richman et al., 1992）[12] や，血小板セロトニンとの関連（Verkes et al., 1998）[13] といった，脳科学的・生物学的な観点からも説明されている。

BPD以外の精神疾患と「むなしさ」との関連についても研究が行われている。Toros et al.（2004）[14] では，10～20代のうつ病患者において，女性は男性よりも悲しみ，「むなしさ」を感じ，易怒性を持っており，それらの感情は体重増加と自尊心の低下に結びつくとされている。一方でBenazzi（2006）[15] はイタリアの成人のBPD患者・双極性障害患者の比較を通して，両者の「むなしさ」を感じる程度に有意差がないと報告している。また，レイプ被害者を対象と

した調査を行い，「むなしさ」を常に感じていることがPTSDの発症しやすさを予測するとした報告も存在する（Daves-Barnoz et al., 1998）[16]。思春期男女において「むなしさ」や退屈感（boredom）はうつ病・アルコール依存を抱える者に多く体験されているとしたBecker et al.（2006）[17] の報告，統合失調症患者・統合失調型パーソナリティ障害患者・それらの精神障害患者を一親等に持つ者は，そうでない者よりも「むなしさ」・退屈感を体験しているという結果（Torgersen et al., 2002）[18] も存在する。

以上のように，「むなしさ」はBPDやうつ病の患者のみに体験される感情ではなく，様々な精神疾患と結びついているといえる。このため，「むなしさ」という感情は患者自身も診断者にも分かりづらく，診断基準としての収束的妥当性に欠けると結論付けた調査もある（Johansen et al., 2004）[19]。日常場面でも多く抱かれるといわれる「むなしさ」であるが，その広範性・多義性が問題となるため，「むなしさ」で説明される感情のみを特定の診断基準として定義づけることは難しいと考えられる。

B．諸問題に対する心理的反応としての「むなしさ」

前項に述べたような，常に感じていたり何らかの精神障害の特徴として体験されたりする感情ではなく，身体疾患や予期せぬ出来事を体験したのちに感じられる「むなしさ」についての研究も多々存在した。以下ではそれらを概観していく。

「むなしさ」は医療現場において適切な心理検査・患者への心理的なケアを行うための手がかりになると考えられる。たとえばHoltzman et al.（2005）[20] は，乳房再建手術を経験する乳がん患者・彼女らに関わる看護師へのインタビューを通して，乳房除去後の患者たちが感じる傷つきやすさ・「むなしさ」へのケアの必要性を示唆している。自殺未遂で救急病棟に入った患者と，そのような患者に関わる医師・看護師の双方に質問紙調査を行ったSchnyder et al.（1999）[21] の研究では，医師・看護師が「絶望」を自殺企図時の患者の感情として想像することに対し，患者本人はコントロール感のなさや「むなしさ」を自殺行動の理由として挙げているといったずれが明らかになっている。心理検査の場面に関しては，ロールシャッハ・テストにおいて，検査者の感情的な反応（逆転移）が，被検査者が悲しみや「むなしさ」に防衛的であるとする検査結果と関連するという報告も存在する（Deschenaux et al., 2012）[22]。

また，性別を考慮した調査については，Kero et al.（2001）[23] は妊娠中絶を経験した女性の「むなしさ」について報告している。加えて，Creighton et al.（2013）[24] は同性友人を亡くした若者男性にインタビューを行い，友人の死・悲嘆そのものに対してだけでなく，彼らが男性的でない感情反応を自身でコントロールできないことについても「むなしさ」を感じていたことを報告している。

本稿冒頭で挙げたように，「むなしさ」は空（くう）という，何かが「無い」状態で体験されると考えることができるが，本節に概観した研究における「むなしさ」は，あるはずのものがない・あってほしいものがないという喪失感に近いものと考えられる。そしてその対象は人であったり自分自身へのコントロール感であったりするのだと推察される。

4．国内の研究動向

我が国における「むなしさ」の研究についても，大きく二種類に分類できた。一つは精神医学的な観点から主に摂食障害との関連を探る調査であり，その他の研究の多くは成長・発達と「むなしさ」の変化との結びつきや，個人が関わるシステムの中で体験される感情としての「むなしさ」についてのものであった。

A．摂食障害との関連を中心とした精神医学的観点からの調査研究

大田垣ほか（2005）[25] は，摂食障害患者は無力感・絶望感を抱いており，体重・体型をコントロールして達成感を得たいと考えることを示唆している。女子青年を対象としたアナログ研究（馬場ほか，2000）[26] においても，「自尊感情の低さ，空虚感があいまったとき，そうした不全感の原因を体型に帰属し，今の体型のせいで幸せになれないといった『現体型のデメリット感』を生じ（中略）痩身願望に至る」と述べられており，不全感を覚えた女性たちがコントロール感を得るための行動をとった結果として摂食障害に陥るというプロセスが想定される。また，中井ほか（2001）[27] が行った神経性無食欲症（制限型）患者のボディイメージについての調査では，ウエスト・ヒップの理想サイズと無力感が負の相関を示すことが明らかになっている。小林ほか（2011）[28] は摂食障害患者への質問紙調査の結果から，無力感が治療への回避的態度と関連しており，特に慢性化した患者に顕著であると報告している。加えて，自分が「変われなかっ

た恥辱感」としても無力感が体験され，あきらめや絶望感をも引き起こすものであると結論付けている。

以上から，自信の持てなさや外界への全般的なコントロール感のなさという意味での「むなしさ」が，自身の行動の結果として分かりやすい指標である体型・体重を常に意識し厳しく管理することにつながっているということがいえる。

B．発達臨床心理学的観点，システムとの関わりの観点からの調査研究

精神的な病理との「むなしさ」の関連を探る研究以外では，学童期から大学生までを対象とした調査を行って尺度を作成するというものが多くみられた。学生や教師を対象とした自由記述調査の分析から項目を選定するという手続きによって，無力感尺度（松田ほか，1990）[29]，無力感測定尺度（奥山ほか，1990）[30]，むなしさ尺度（堤，1994）[31] がこれまでに作成されてきた。また，空虚感については既存の尺度を組み合わせて測定している調査がみられる（徳本，2001；三浦ほか，2002）[32][33]。これらの「むなしさ」やその類義語についての尺度を見ていくと，自尊感情の低さ，疎外感・孤独感という因子がほとんどの分析において見いだされている。しかし，小中学生の抱く無力感については，松田ほか（1990）[34]，奥山ほか（1990）[35] が消極性や不安・抑うつという因子を報告している点で高校生以上と異なる。この違いは，感情・思考・行動の区別や自己の感情のモニタリングが発達途上であるために，児童・生徒が学校や友人関係といった日常場面で「むなしさ」を感じた結果としての状態，行動スタイルが因子として見出されたと考えることもできるだろう。

空虚感あるいは「むなしさ」は，自分自身のみの問題ではなく，他者との関わりにおいても実感される感情である。発達に伴う親子関係の変化と空虚感の関連についての質問紙調査（徳本，2001）[36] や，悩み相談をした相手からの否定的働きかけが空虚感そして自己否定につながると結論付けたインタビュー調査（堀江ほか，2007）[37] も存在する。親や友人との二者関係や家族関係よりもさらに上位の「社会」というシステムの観点からの調査・検討も少数ではあるが行われており，中高生において「社会とのつながり」感が高いと空虚感が低い傾向があるとの報告（三浦ほか，2002）[38] や，社会学的な観点から成人女性の無力感を説明した研究（岩間，1994）[39] がある。以上のように，「むなしさ」は個人の成長・発達と関連し，様々なレベルのシステムの中で体験されていることがわかる。

5．研究の課題と方向性

ここまで，国内外における「むなしさ」に関連する研究の動向について概観してきた。本章では，我が国における研究の課題と今後の方向性について述べる。

日本における「むなしさ」の研究は，主に学生を対象としたアナログ研究が散発的に行われているにとどまり，尺度の比較や統一のための知見は集積できていないという現状がある。また，精神医学的観点を取り入れた研究についても，摂食障害についての調査がいくつか存在する程度であり，国や文化圏を問わず多くの罹患者が存在する気分障害との関連や，欧米で行われているようなパーソナリティ障害の特徴に関しては明らかになっていない。

我が国において，今後「むなしさ」を正確に把握し，臨床心理学的援助に結びつく知見を蓄積するために重要な視点として，以下の 3 つが先行研究から考えられた。

第一に挙げられるのは，「むなしさ」の病理性，逆に言い換えれば，精神障害の罹患者と健常群での連続性という視点である。これまでに概観したように，「むなしさ（emptiness）」という概念は様々な精神障害患者に体験される感情であるといえる。「むなしさ」はアルコール依存症患者も抱いていること（Becker et al., 2006；榊，2004）[40][41] や，自殺行動との関連も見出だされていること（Schnyder et al, 1999）[42] から，習慣的・嗜癖的な行動の問題の引き金になっていたり，生活機能の低下を説明していたりする可能性があるとも考えられる。先行研究から導き出されるこれらの仮説を今後，実証的に検証するために，欧米の研究にみられるような患者群とアナログ群の比較を日本で行っていくことが有意義であるといえよう。

第二に，発達的・時間的変化の視点である。「むなしさ」を抱えるのは学童～青年期だけではないと想定されるにも関わらず，本邦における成人期以降を対象とした調査・検討はポスト子育て期の女性（兼田ほか，2007）[43]，高齢者のQOLについて（福本ほか，2000）[44] 程度にとどまっている。質的研究あるいは縦断的調査を活用し，発達段階に応じた「むなしさ」の感じ方や，個人内・対人間・組織内などどのようなレベルのシステムで「むなしさ」を感じるのかをつぶさに把握する調査研究が求められる。また，「むなし

さ」の時間的変化は第一の視点とも関連しており，健常群が発達段階の変化やライフイベントなどにより「むなしさ」を感じ，精神的問題を抱えるというプロセスが存在している可能性（大上，2013）[45] もある。これらを検討することも，臨床心理学的実践に資すると考えられる。

第三は，「むなしさ」がもつ肯定的意味という視点である。「むなしさ」は否定的な感情であると捉えられることが多いが，単に除去すればいいというものでもない。近年，欧米を中心に宗教あるいはスピリチュアリティという観点や，禅の思想（Thomson, 2000）[46] やマインドフルネスの考え方（Manocha, 2011）[47] との関連から理論的考察がなされるようになってきている。我が国でも，熊倉（2012）[48] が抑うつ患者とのやりとりの経験から，空虚感を生き延びた患者がおしなべて「私にとって避けることの出来ない貴重な体験だった」と語ると報告し，日本人の「むなしさ」の心理について空海の思想をもとに説明を試みている。実証的な研究については，「むなしさ」の感情が特に自由主義的な政治信条をもつキリスト教信者を信仰に向かわせる可能性の示唆（McAdams, 2008）[49] や，「むなしさ」に対して「力になる」「自分が無理をしないためにある」といった肯定的な意味づけを行っている前期高齢者が存在しているという報告（大上，2013）[50] もある。今後，あらゆる年代・文化背景において，否定的意味のみならず肯定的に受け容れられる「むなしさ」の検証をさらに進めることで，現在は理論的な示唆にとどまっている西洋・東洋の「むなしさ」の相違点（Ho et al., 2007）[51] についても明らかにすることができる可能性がある。

そして，以上に述べてきた３つの視点をもとに知見の蓄積・一般化を行っていくことは，精神障害の患者への心理的援助，あるいは発達段階での危機を抱え「むなしさ」を感じた人への予防的観点からの援助への活用につながるといえる。ひいては，「むなしさ」をはじめとする感情の捉えられ方の違いを足がかりとして，欧米での心理療法を我が国に導入する際に考慮すべき文化差についても重要な示唆が得られることが期待される。

注

1）本論文において，人々が抱く感情としての心理学用語のむなしさは，本文中では「むなしさ」とカッコ付きで表記することとする。

2）竹内整一　『「はかなさ」と日本人　無常の日本精神史』平凡社，2007.

3）諸冨祥彦　『〈むなしさ〉の心理学――なぜ満たされないのか』講談社，1997.

4）松村明　監修，小学館『大辞泉』編集部　編　『大辞泉　増補・新装版』小学館，1998.

5）武部良明　編著　『必携 類語実用辞典　新装版』三省堂，2004.

6）境界性パーソナリティ障害の診断基準[52] [53]

対人関係，自己像，感情の不安定および著しい衝動性の広範な様式で，成人期早期までに始まり，種々の状況で明らかになる。以下のうち５つ（またはそれ以上）によって示される。

(1) 現実に，または想像の中で見捨てられることを避けようとするなりふりかまわぬ努力
(2) 理想化とこきおろしとの両極端を揺れ動くことによって特徴づけられる不安定で激しい対人関係様式
(3) 不安定な自己感
(4) 浪費・性行為を含む衝動的な行動
(5) 自殺の行動，そぶり，自傷行為の繰り返し
(6) 顕著な感情不安定性
(7) 慢性的な空虚感
(8) 怒りの制御に関する顕著な問題
(9) ストレス関連性の妄想用観念または解離性症状

7）Zung, W. W. K. 1965. “A self-rating depression scale” *Archives of General Psychiatry*, 12, 63-70.

8）内閣府　2012.『平成24年版自殺対策白書　概要版』http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/whitepaper/w-2012/pdf/gaiyou/index.html

9）Morgan, T.A., Chelminski,I., Young,D., Dalrymple, K., Zimmerman, M. 2013. “Differences between older and younger adults with borderline personality disorder on clinical presentation and impairment” *Journal of Psychiatric Research* 47: 1507-1513.

10）Powers,A.D., Gleason,M.E., Oltmanns,T.F. 2013. “Symptoms of borderline personality disorder predict interpersonal (but not independent) stressful life events in a community sample of older adults” *Journal of Abnormal Psychology* 122(2): 469-474.

11）Mavissakalian,M.R., Hamann,M.S., Haidar,S.A., DeGroot,C.M. 1995. “Correlates of DSM-Ⅲ personality disorder in generalized anxiety disorder” *Journal of Anxiety Disorders* 9(2): 103-115.

12）Richman,N.E., Sokolove,R.L. 1992. “The experience of aloneness, object representation, and evocative memory in borderline and neurotic patients” *Psychoanalytic Psychology* 9(1): 77-91.

13）Verkes,R.J., Van der Mast,R.C., Kerkhof,J.F.M., Fekkes,D., Hengeveld,M.W., Tuyl,J.P., Van Lempen,G.M.J. 1998. “Platenet serotonin, Monoamine oxidase activity, and [H3]paroxetine binding related to impulsive suicide attempts and borderline personality disorder” *Society of Biological Psychiatry* 43: 740-746.

14）Toros,F., Gamsiz Bilgin,N., Bugdayci,R., Sasmaz,T., Kurt,O., Camdeviren,H. 2004. “Prevalence of depression as measured by the CBDI in a predominantly adolescent school population in Turkey” *European Psychiatry* 19: 264-271.

15）Benazzi,F. 2006. “Borderline personality-bipolar spectrum relationship” *Progress in Neuro-Psychopharmacology & Biological*

Psychiatry 30: 68-74.
16）Darves-Bornoz,J.M., Lepine,J.P., Choquet,M., Berger,C., Degiovannni,A., Gaillard,P. 1998. "Predictive factors of chronic Post-Traumatic Stress Disorder in rape victims" *European Psychiatry* 13: 281-287.
17）Becker,D.F., McGlashan,T.H., Grilo,C.M. 2006. " Exploratory factor analysis of borderline personality disorder criteria in hospitalized adolescents" *Comprehensive Psychiatry* 47: 99-105.
18）Torgersen,S., Edvardsen,J., Oien,P.A., Onstad,S., Skre,I., Lygren,S., Kringlen,E. 2002. "Schizotypal personality disorder inside and outside the schizophrenic spectrum" *Schizophrenia Research* 54: 33-38.
19）Johansen,M., Karterud,S., Pedersen,G., Gude,T., Falkum,E. 2004. "An investigation of the prototype validity of the borderline DSM-Ⅳ construct" *Acta Psychiatrica Scandinavica* 109: 289-298.
20）Holtzmann,J., Timm,H. 2005. " The exoeriences of and the nursing care for breast cancer patients undergoing immediate breast reconstruction" *European Journal of Cancer Care* 14: 310-318.
21）Schnyder,U., Valach,L., Bichsel,K., Michel,K. 1999. " Attempted Suicide -Do we understand the patient's reasons?-" *General Hospital Psychiatry* 21: 62-69.
22）Deschenaux,E., Lecours,S., Doyon,J., Briand-Malenfant,R. 2012. " Countertransference in the Rorschach situation as a clue to the patient's affective functioning" *Rorschachiana* 33: 125-144.
23）Kero,A., Hogberg,U., Jacobsson,L., Lalos,A. 2001. " Legal abortion: a painful necessity" *Social Science & Medicine* 53: 1481-1490.
24）Creighton,G., Oliffe,J.L., Butterwick,S., Saewyc,E. 2013. " After the death of a friend): Young men's grief and masculine identities" *Social Science & Medicine* 84: 35-43.
25）大田垣洋子，米澤治文，志和資朗，斎藤浩，中村研 2005. 「摂食障害患者の自尊感情についての検討」『心身医学』 第 3 巻，第45号，pp.225-231.
26）馬場安希・菅原健介 2000. 「女子青年における痩身願望についての研究」『教育心理学研究』 第48号，pp.267-274.
27）中井義勝，今井浩，柏谷久美，吉川真里 2001. 「摂食障害における身体イメージ異常の成因について」『心身医学』 第 4 巻，第41号，pp.281-286.
28）小林仁美・石川俊男・野村忍 2011. 「摂食障害の治療初期における患者が有する治療に対する抵抗感の検討」『女性心身医学』 第 2 巻，第16号，pp.146-152.
29）松田伯彦，橋本巌，野口彰代，大西久男，久米弘，片山美智代 1990. 「児童の無力感の要因分析」『日本教育心理学会総会発表臨文集』 第32巻，p. 193.
30）奥山功教，内藤勇次 1990. 「児童・生徒の無力感に測定に関する研究」『日本教育心理学会総会発表臨文集』 第32巻，p. 194.
31）堤雅雄 1994. 「むなしさ――青年期の実存的空虚感に関する発達的一研究」『社会心理学研究』 第10号，pp.95-103.
32）徳本祥 2001. 「青年期における空虚感と親からの心理的分離との関連に関する研究」『心理臨床学研究』 第 2 巻，第19号，pp.109-118.
33）三浦直樹，原岡一馬 2002. 「中高生における"社会とのつながり"と心理的幸福感の関係」『久留米大学心理学研究』 第 1 号，pp.71-80.
34）同上，p.193.
35）同上，p.194.
36）同上，pp.109-118.
37）堀江幸治・杉山沙織 2007. 「高校生の悩み解決過程に関する研究 ―相談相手との関係性および助言内容が決断に及ぼす影響について―」『九州女子大学紀要』 第 1 巻，第44号，pp.61-77.
38）同上，pp.71-80.
39）岩間暁子 1994. 「社会的不公平の認知メカニズム」『現代社会学研究』 第 7 巻，pp.199-122.
40）同上，pp.99-105.
41）榊惠子 2004. 「アルコール専門病棟での患者 - 看護師関係と看護師の体験 －グループワークでの参加観察と看護師へのインタビューを通して－」『日本精神保健看護学会誌』 第 1 巻，第13号，pp.24-33.
42）同上，pp.62-69.
43）兼田祐美・岡本祐子 2007. 「ポスト子育て期女性のアイデンティティ再体制化に関する研究」『広島大学心理学研究』 第 7 号，pp.187-206.
44）福本安甫・江草安彦・関谷真 2000. 「QOL評価における影響要因の検討」『川崎医療福祉学会誌』 第 1 巻，第10号，pp.33-38.
45）大上真礼 2013.「前期高齢者の「むなしさ」についての質的研究――発達的特徴と体験プロセスに着目して――」 2012年度東京大学大学院教育学研究科修士論文（未公刊）
46）Thomson, R. F. 2000. " Zazen and Psychotherapeutic Presence" *American Jouenal of Psychotherapy* 54(4): 531-548.
47）Manocha, R. 2011. " Intervention Insights: Meditation, mindfulness and mind-emptiness" *Acta Neuropsychiatrica* 23: 46-47.
48）熊倉伸宏 『肯定の心理学 空海から芭蕉まで』新興医学出版社，2012.
49）McAdams,D.P., Albaugh,M. 2008. " What if there were no God? Politically conservative and liberal Christians imagine their lives without faith" *Journal of Research in Personality* 42: 1668-1672.
50）同上，未公刊.
51）Ho,D.Y.F., Ho,R.T.H. 2007. " Measuring spirituality and spiritual emptiness: Toward Ecumenicity and transcultural applicability" *Review of General Psychology* 11(1): 62-74.
52）下山晴彦 編著 『テキスト臨床心理学 別巻 理解のための手引き』誠信書房，2008.
53）American Psychiatric Association., 2000. " Diagnostic and statistical manual of mental disorders."（高橋三郎，大野裕，染矢俊幸訳『DSM-IV-TR精神疾患の診断・統計マニュアル』医学書院，2002）.

（指導教員 下山晴彦教授）